●特集【女性医師のコーナー】対談企画

第20回　平成27年９月１日㈫

徳島大学病院
卒後臨床研修センター　副センター長
　脳神経外科　　西　　京子先生（中央）

卒後臨床研修センター　特任助教
　消化器内科　　田中久美子先生　（左）

徳島市医師会女性医師プロジェクト委員会
　委員長　　坂東　智子先生　（右）

【脳のミステリアスにひかれ】

坂東　本日はお忙しいところを有り難うございます。卒後臨床研修センターの西京子先生と田中久美子先生にお話を伺います。よろしくお願いいたします。

　まず、脳神経外科の女性医師の先駆けとしてご活躍中の西先生からお伺いいたします。そういう道に進まれる女性は、非常に少なかったと思いますが。

西　私は平成３年に徳島大学を卒業し、徳島大学脳神経外科に初代女医として入局しました。

坂東　脳神経外科のどのような点に興味を持たれて進まれたのですか。

西　随分と昔のことになりますね。自分がどうやって進路を決めたかというのを今話すのはなかなか難しくて恥ずかしいですが、一つには神経系が好きだった、ということが言えます。脳はミステリアスで分からないことが多かったですし、何でそう考えるのかということにも興味がありました。また、他の部位を治しても脳にダメージを受けると全てがダメになるというところとか、救急など何かあった時に、すぐに脳外科医が呼ばれたりするので、他の人に譲りたくなかったのかもしれません。若かったんでしょうね。でも、何より開頭した脳は、すごくきれいで神秘的だったんです。難しいことをじっくり考えるよりは、直接、手術で切ったり、取ったりする方が自分に向いているのではないかと思いました。

坂東　脳外科に進む時に迷われることはなかったんですか。

西　興味があっても、その診療科に入れるかどうか、また、女医として迎えられるかどうかというのは別で、私はタイミングが良かったのだと思います。ちょうど、初代の脳神経外科教授の松本圭蔵先生が病院長をなされた後で、女医さんがいなく、誰かを入れようという雰囲気もあり、非常に温かく迎えていただきました。

【脳外科の女医の先駆けとして】

坂東　実際に入局していかがでしたか。

西　初めての女医なので、入局前から、当直や更衣などをどうさせようか、指導医として誰をつけようかとか、医局の先生に非常に悩んでいただいた記憶があります。その当時は、今のような研修制度がなかったので、決めたらダイレクトに入局だったんです。入っ

西京子先生

てダメならまた考えようというような調子で、そんなに将来について悩む間もありませんでした。

坂東　**指導者にも恵まれてたようですね。**

西　そういう意味では初代の女医として人にも環境にも非常に恵まれました。過去がないので何をやっても大丈夫というか前例がないところに行くのは、比較対象になるものがなかったので、あまり怖くはありませんでした。多くの先生やコメディカルの方、たくさんの患者さんなどの周りに救われ、大事に育ててもらいながらやっとここまで来ました。

坂東　**でも、手術になるとかなり長時間ですよね。体力的な面とか、お考えにならなかったのですか。**

西　ダメだったらまたやり直せばいいや、というような感じでしたね。長い手術もありますけど、結構、短いのもあります。長かったのは大学くらいで、他の病院では、朝から始めて夕方に終わる手術がほとんどで、あとは急患くらいですね。

坂東　**脳外科の救急の対応は24時間で大変でしょう。**

西　必要なのは、フットワークですよ。とにかく頭で考えるより、フットワークでした。

坂東　**先生のお蔭で、後輩たちが育ってきたと思えるんですが。**

西　実際は、私の次の花岡真実先生まで、８年あいているんですよ。私はあんまりいいモデルではないと思っているのですが。

田中　そんなことはないですよ。いらっしゃってくれると思うだけで全然違いますから。

西　でも、この人みたいにならなければと思うのはしんどいので、モデルは大勢いた方がいいと思っています。徳島大学の脳神経外科は、２代目の永廣信治教授になってから、さらに女医さんが入ってきやすい雰囲気になり、私の後輩として、花岡先生を含め現在３名います。皆さん、すごいですが、それぞれ異なるタイプなので、これからの魅力的な脳外科女医モデルになると思います。

【診断も治療もできる内視鏡の魅力】

坂東　**田中先生は消化器内科をご専門になさっています。消化器内科は、進歩が著しいところで、研修中もお忙しいと思いますが。**

田中　昔、外科の先生がしていた胃癌の手術も、早期だったら内視鏡で治療ができるようになって、患者さんのメリットは大きくなっていると思います。その分手技には緻密さが

田中久美子先生

求められて、術者のストレスは割と大きくなってきているのかもしれません。でも完治して退院していく患者さんを診るのは喜びですし、また治すことが難しい進行癌の患者さんを最期まで診させていただくこともありますので、両方に携われるのは幸せなことです。

西　　でも、消化器内科に決めるまでは、相当悩みましたよね。田中先生は、徳島大学を平成20年に卒業され、私も平成20年に卒後臨床研修センターに配属されたので、一緒に研修医室で過ごした研修医の１人なんです。高松市民病院基幹の研修医でしたね。

田中　私は高松市民病院と徳島大学病院で２年間の初期研修を行い、高松市民病院から８ヵ月徳島大学病院に研修に来てご一緒させていただきました。

西　　当時から優秀で、いろんな診療科から勧誘されていましたので、最後に消化器内科に決めるのが大変だったと思いますよ。

坂東　迷われた後、消化器内科を選ばれた理由は何ですか。

坂東智子先生

田中　３年目に消化器内科に入局しましたが、どの科に進むべきかかなり迷いました。しかし、全身を診ることができる内科医になりたいと思い、消化器内科を選びました。カメラ（内視鏡）を身につけたいと思ったことも一因です。

坂東　内視鏡は診断も治療もできるのが大きな魅力ですよね。

田中　自分の武器になる何かがあったらいいなと思っていたのですが、研修医の間に色々やらせていただいて内視鏡が楽しくなってきたという感じですね。また、内視鏡検査などの技術は、長く医師として働いていく上で役立つものだと思うし、女性医師にもお薦めです。

坂東　消化器内科は、内科の中でも人気のある科で、教育体制もしっかりしているので、入局される方が多いと伺ったんですが。

田中　そうですね。私が入局したときの同期は７人でしたが、若手が割と毎年コンスタントに入局してきます。消化器内科の医局のいいところは、やはりみんな仲が良く、和気あいあいとしているところだと思います。先生方も上から順に、いわゆる屋根瓦方式で指導してくださるんです。一応、主治医制ですが、病棟ではチームがありますので、自分が主体になって診つつも、相談ができる先生が必ずいるのでありがたいです。

坂東　ある程度できるようになると外病院に出て、また研修を積まれていくのですか。

田中　最初に大学の医局に入局して１年くらい勉強して、外の市中病院に出て、また戻ってくるという流れです。私の場合は卒後４年目に高知病院、５年目に徳島県立中央病院に勤務させていただき、一般内科から救急まで幅広く学ぶことができました。６年目に徳島大学病院に戻り、７年目の昨年４月から卒後臨床研修センターに勤めております。

坂東　大学に戻ってきて専門医をめざすのですね。

田中　大きな流れとしてはそうですね。

【夫と二人三脚で歩む女医の道】

西　　田中先生のご主人も消化器内科医ですよ。ご主人の田中貴大先生は、私が卒後臨床研修センターに配属になった初年度の徳島大学病院研修医１年目のお１人で、和歌山県立医科大学のご出身です。

坂東　大学に残る方が減った時ですか。

西　　そうです。私が卒後臨床研修センターの初代専任医師に任命されるきっかけとなったのは、徳島大学病院の研修医が激減したからです。それまで私は、研修状況を知らなかったんですが、最初に大学病院でかかわった研修医１年目は５人しかいなかったし、しかも徳大卒は１人だけで、あとは他大学出身でした。すごいことになっているな……と正直思いましたね。その中の１人が今の田中先生のご主人で、消化器内科同士で結婚されたということです。

坂東　同じ科というのはどうですか。。

田中　最初は少し気まずいかなと思っていたんです。でも私は内視鏡の方を、主人は肝臓の方を専門にしていますし、仕事面でも相談しやすく、今は逆に働きやすいと思っています。

坂東　相談しながらできるっていうのは心強いですね。お互いのペースもよく分かってるんで、いいかもしれないですね。

西　　よく似た感じのお２人なんですよ。とっても優しいご主人で、すごく素敵な方でね。

坂東　家庭も温かい感じなのでしょうね。ご主人は家のことを手伝ってくださるんですか。

田中　そうですね、学生の時に独り暮らしをしていたので、家事はしてくれますね。

西　　２人とも夜遅くまで病院に残って働いているんです。私はどっちかの仕事が終われば、さっさと帰ったらいいのにと思うんですが、待ち合わせて仲良く帰るんですよ。そんなご夫婦だからだと思いますが、旦那さんのご両親もお２人が働いていることにご理解があり、ご両親との関係もとてもいいみたいなんです。

坂東　いいですね。ご両親とも仲良くできるのは、やっぱり人柄ですよね。そういえば、田中先生の地元は、田舎だと聞いておりますが。

田中　中学校まで東祖谷だったんですが、高校は脇町高校に行って、徳大に入学しました。

坂東　教育面でも大変だったと思いますが、ご両親も大変でしたね。

田中　そうですね。でものびのび育ててもらいました。

西　　私とタイプが全然違うでしょう。彼女は嫌って言わないし、癒し系なんですよ。一緒に頑張りましょうという優しさがあるんですね。

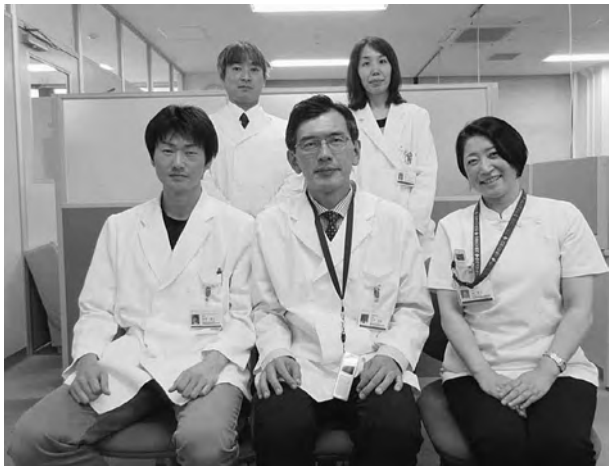
坂東　面倒見のいい研修医達の姉上という感じですね。

【進化し続ける卒後臨床研修センター】

坂東　それでは、次に卒後研修のことを教えていただきたいと思います。西先生は研修医の母として、お子さんを指導するように接しているとのことですが。

西　完全に母の年代になっちゃっいました。母というよりパトロンですね。若い人が大勢いるので皆でご飯食べに行ったりしますね。ただ、私が配属されたときは、ほんとに研修医がいなくて、最初は研修環境も悪くて、卒後臨床研修センターに初めての専任医師として、泌尿器科の山本恭代先生とともに起用されたんです。現学長の香川征先生が、病院長だったころですが、脳外科と泌尿器科の女医２人を起用するっていうのも、不思議でした。私たちと同時に、現総合診療医学分野（旧：地域医療学講座）の谷憲治教授が、センター長として着任されたんです。

その後は、センタースタッフとして、たくさんの先生にご協力していただきました。消化器移植外科の宮谷知彦先生に来ていただいて、それから循環器内科の上田由佳先生、その後、精神科の渡部真也先生、呼吸器外科の梶浦耕一郎先生、また昨年度からは、田中先生と一緒に循環器内科の飛梅威先生がおいでになり、今年の４月からは、新たに梶浦先生に代わって食道乳腺甲状腺外科の西野豪志先生にメンバーとして加わってもらっています。センター長は、谷先生の後、循環器内科の佐田政隆教授に併任していただいています。平成20年度から変わらないのは私だけで、他のスタッフは２、３年毎に交代しています。指導医も研修医もリニューアルしながら交流していくので、私にとってもいつも新鮮です。



坂東　研修医が増えてきましたよね、今年もかなり入ってきましたね。

西　でも、やっぱりまだ不安定ですけどね。最初に比べたらいいのですが、徳島に人を残すのはなかなか難しいです。初期研修後でさえ、徳島大学に戻すのも難しいので、そんなにうまくはいかないです。でも、研修医と一緒にいると、成長するのがよく分かるので、皆かわいいですよ。

坂東　人間的な触れ合いを、大事にされているという感じがします。

西　そうですね、この日曜日も神戸まで結婚式に行って来ました。祝辞も頑張って考えますし、結婚式もまだいっぱいあるんですよ。

坂東　研修医で結婚される方も多いのですね。妊娠、出産される方もいらっしゃるのでは？

西　今までに何人もいます。

坂東　そういう方は、研修継続をどのようにしていますか？90日の免除期間がありますが。

西　産休が終って、研修にすぐ戻られる方もいますし、そのあと育児休暇を取って、もう少し延長して休まれるという方もいます。研修医の妊娠ぐらいでは、もう驚かないし、たいしたことではないですよ。

坂東　皆さん、研修を終えられて、次のステップに行かれてるんですよね。

西　　きちんと仕事に復帰するようになると、仲間の研修医たちは、男の子もみんな協力します。妊娠・出産などを側で見ていると、すごく勉強になると思いますね。

【研修医として身につけるものは】

坂東　先生からのアドバイスとして、研修に入る前にこういうことに気をつけた方がいいということがありますか？

西　　勉強以外でこけた時に、どう対処するかというのが、やっぱり難しいんですよ。患者さんとか指導医の先生とか、いろんな方とのコミュニケーションをはかる人間関係で落ち込むことは、よくあるんです。環境も変わるし、診療科のローテーションもあるので。研修医によって適応能力が異なりますが、できるだけ学生の間に医学書だけじゃなく、社会勉強やいろいろな経験をしておくことが大事ですね。

坂東　コミュニケーション能力を高めておいて欲しいということですか。

田中　幅広いというか、いろいろと経験をしていると、繋がりも持ちやすくていいようですね。

西　　研修中は、いろいろと問題を起こすんですよ。研修医が、何かやっかいな問題を起こしたら､私もすぐに謝りに行きますからね。

坂東　先生が親代わりにですか？

西　　研修でお世話になっているので、直接、県外でもどこにでも謝りに行きます。もちろん、一緒に怒ったりもしますけれど。

坂東　なかなか大変ですね。田中先生は、相談されていかがですか。

田中　みんな、かわいらしいなと思いますね。

西　　怒るのも愛情だけど、ずっと聞いてあげてというのも大事なのかもしれません。

坂東　そうかもしれませんね。大事なポイントをアドバイスというか、怒るっていうか。昔は指導医から怒られることがありましたが、今はそうじゃないんでしょうね。

西　　指導として、怒るのも大事ですが、怒り方の問題でしょうね。

田中　そうですね。表現の仕方ですね。

西　　怒り方の上手な先生は、その辺りの愛情が伝わる怒り方をされています。そうすると研修医もやっぱり分かるし、先生に付いていこうと思いますよね。そこら辺りが難しいんですね。だから研修医には、上手に怒られるだけでなく、上手に指導する能力も身に付けてもらい、後輩を育てていって欲しいですね。ここのセンターを卒業して、今、指導医あるいは上級医になっている先生は、自分がしんどい思いをしてきた分、皆さん研修医とか学生を大事にしてくれます。だから屋根瓦式という意味では非常にいい感じですね。もう数年して中堅が充実してくると、大学病院はもっと良くなると思います。今、指導医として田中先生らの年代が、そうなりかけてきましたから。

坂東　このくらいの年代の先生には、非常に相談しやすいっていいますね。もっと上にな

ると遠慮がありますが。

西　　どんなにいい先生でも身近なことを相談するのは、年齢差がかなりあるとなかなか難しいですね。今、センターには飛梅先生、西野先生、田中先生がおられますが、私よりお若いですし、タイプも様々で出身大学も異なります。飛梅先生は防衛医科大学を、西野先生は高知大学を卒業されています。

【プログラムの充実は大変ですよ】

坂東　確かに他の大学を卒業した先生方がおられると、いいかもしれませんね。研修システムの「AWA すだちプログラム」では、「巣立ち」をむかえて欲しいとの願いがあるそうです。自由度があって、非常に面白いプログラムですね。オンリーワン（Only One 研修）すなわち研修医の皆さんが自分で決められるようになっています。カリキュラムを整える立場としては、大変かなと思うんですが。

西　　大変ですね。いろいろ研修医と相談をしてローテーションを決めたり変更したり、ときには診療科の先生のところに、研修医と一緒に頭を下げに行ったりすることもあります。でも、プログラムの影響ではないと思うのですが、今年の病院見学は忙しくて、対応するのが大変でした。

田中　去年に比べると、今年は多かったですね。

西　　ここは長期戦なんですよ。今、頑張ってもすぐに結果が出ない。今頑張って、来年も頑張らないと次が出ないっていう感じで、なかなか厳しいです。

坂東　人を育てるのは、やはり時間がかかりますよね。

西　　学生、研修医、指導医と成長過程をずっとみていますとね……。徳島大学病院では、医療人育成として、本年度のオリエンテーションで、初めて全職種合同の新人情報交換会を開催しました。総勢311人でした。

病院長をはじめ、診療科（医科・歯科）の教授や指導医、看護部長や師長、薬剤部や診療支援部などからたくさん参加がありました。今までは、オリエンテーションも主には職種ごとにやっていたので、今年はほんとに盛大でしたね。

坂東　他の職種の方とも顔なじみができていいですね。

西　　やはり若いころから一緒に始めるというのは、いいのかもしれないなと思いました。最初に一緒に仲よくやっておかないと、病棟に入ってうまくやってと言われても難しいかもしれないですから。研修医のオリエンテーションにも、他職種の方が指導にたくさん来てくれました。

坂東　病院全体で育てていくというような感じですね。これだけの大きな規模にもかかわ

らず、それが出来るのはすごいですよね。

西　診療科の先生も、大勢来て下さったので非常に有り難かったです。センターの忘年会も、病院長や診療科の先生と研修医が混じり、賑やかなんですよ。

【他の病院で幅を広げ逞しくなる】

坂東　他大学卒業後、徳島に帰ってくる研修医も多いのではないですか。

西　多いかどうかは、ちょっと分からないんですけど。研修医はみんないい子ですよ。仲いいしね。徳大の研修医だけじゃなくて、外からの研修医も受けており、今、日本医科大学附属病院からも２人来ています。

交換というか、徳大からも協力病院にお世話になっていますが、徳島県立中央病院や徳島市民病院はもちろん、徳島県鳴門病院、高松市民病院からも研修に来ているし、ここのセンターは、人が交流する場としては、いいんじゃないですか。

坂東　いろんな方と交流があるっていうことでは、徳島大学を選んでおくと視野が広がるかもしれませんね。でも、西先生は全国を回り大変ですね。

西　時々、研修に出している病院には、どんな様子かを見てきます。今回は、熊本へ行きます。私も、徳大だけしか知らないと改良しようがないので、他へ行って勉強をして、いろんな先生と交流して刺激を受けて、研修をよりいいものに出来ればと思っています。

協力病院で研修を開始する時は、大変でしょうけど……。一回り成長して帰ってくるのを見るのも楽しみですよ。帰ってきたらみんな逞しいよね。

田中　逞しくなってますよね。やはりいろんな指導医の先生や同期生、他大学の方と知り合いになれますから。

坂東　一つの病院だけの研修医とは、また違った意味で非常に成長の幅があるのかもしれませんね。

田中　しかし、預かる身としては、心配なところもありますね。今、ちょうど他大学から新しく研修医が来ていて。みんな、無事に研修を終えて元気で帰ってくれたらいいのになと思います。

坂東　預かる立場としては、また違った心配があるんですね。県外へ出たご子弟も戻って来てますが、どうですか。

西　そういう研修医も何人かいるので、ぜひぜひ、徳島に帰って来る選択肢の一つに選んでいただきたいですね。病院見学だけではなく、研修に来て一緒に働けると嬉しいです。

【次代を育て芽吹き待つ楽しみ】

坂東　また、先生は、学生の面倒も見ているとうかがったんですが。

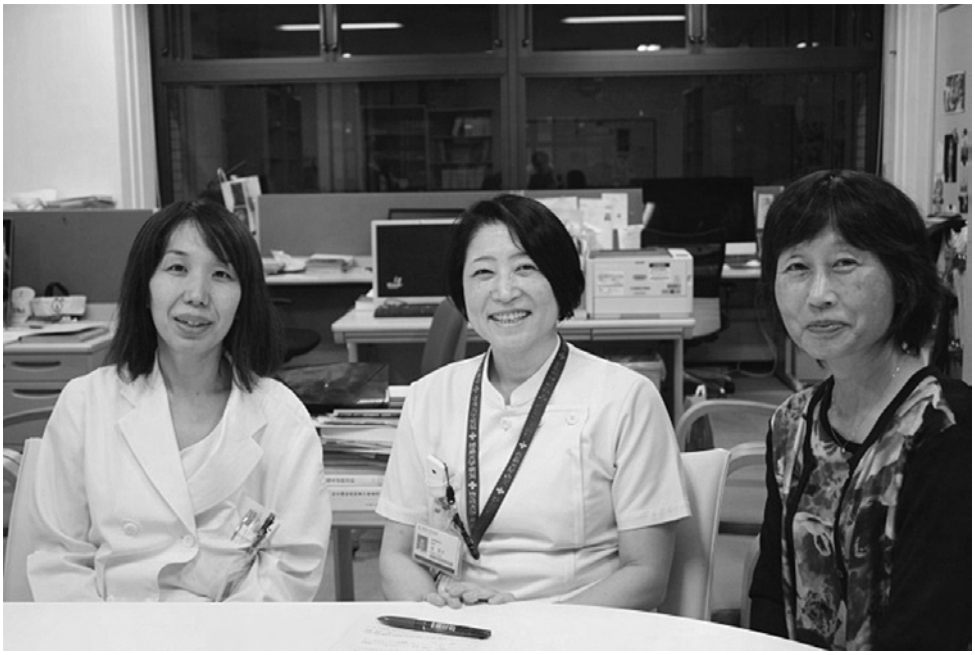
西　そうですね。徳島大学病院の研修に入る、入らないにかかわらず、マッチングを受ける学生のお手伝いもしているんです。都会は激戦区なので県外を希望する学生から頼まれると、小論文などを指導したりしていま

す。私だけじゃなくて、センターの先生にも意見をもらったりしています。先のことは分からないですが、その人たちがどこに行っても、研修でステップアップして、将来のためにちょっとでも役に立てたらいいなあ……という感じです。そして、徳島に戻ってくる機会があったら、徳島の医療に貢献していただければ、なお有り難いと思っています。

次々と研修医が新しい指導医になって、また、その次を育ててくれたらいいなと思いますね。

坂東　この数年間に、田中先生を含めてたくさん育ってきたんだろうと思いますので楽しみですね。

西　そうなんですよね。これからも、臨床研修制度を経験された先生方に、研修医のサポートをしていただければと思っています。

坂東　スタッフもさらに充実しているという感じですね。すごくいいお話を聞かせていただきました。先生方のご活躍、心からお祈りしております。

全員　ありがとうございました。